

北海道合鴨水稲会

水かき通信

【本号の内容】

1. 第15回 圃場見学会報告 (久保田慎二)
2. 名寄徒然草 (6)
食用油と肥料の自給率向上を目指すひまわりプロジェクトの取組 (三島名誉顧問)
3. 事務局からのお知らせ：第20回全国合鴨フォーラム島根大会について

第15回 北海道合鴨水稲会圃場見学会報告

久保田慎二

去る7月4日に行われた2009年度合鴨水稲会の圃場見学会について報告致します。今回は、まず北竜町の川本農場で合鴨圃場を、次に同じく北竜町のナチュラルファーム黄倉で有機圃場を、そして最後に滝川市の中野ファームでなたね搾油施設を見学するというスケジュールで行われました。

1. 川本農場見学

当日は雲が多く、気温もあまり高くなく圃場見学会には絶好の天気でした。集合は川本農場の隣にある都市と農村交流センターに13時となっていました。我々は懇親会の買い出しに時間がかかり、少し遅れてしまいました。



「都市と農村交流センター」

事務局をはじめ参加者が「都市と農村交流センター」に集合した後に、代表世話人の折

坂氏のご挨拶を聞いて、圃場見学会1軒目の川本農場へ移動し「合鴨農法」に関する説明を受けました。



水田で虫をついばむ合鴨

我々が合鴨圃場に到着すると、畦に上がっていた合鴨たちは列をなして圃場の中に入って行き、昆虫などを食べる姿を見ることができました。川本さんのお話によると、合鴨農法を実施しているのはおよそ3haとのことです。合鴨は集団で行動する生き物なので、水田に放した当初は、群れについていけなくて死ぬ合鴨がかなりいるそうです。また鳥や狐に採られないように、圃場全体に網を張って電気をながすなどの対策を行っていました。その他に合鴨が同じところに集中しないために、川本さんが合鴨を放す場所を変えるなど、平均的に除草が出来るように苦労されている

そうです。

私たちが見た圃場で栽培されていた品種は「おぼろづき」で、水田から引き揚げた合鴨は滝川市の業者に販売しているそうです。

2. 黄倉農場見学

「川本農場」で「合鴨農法」の見学を終えた我々は、次の目的地である、「ナチュラルファーム黄倉」へと向かいました。



「ナチュラルファーム黄倉」にて

「ナチュラルファーム黄倉」の概要を説明すると、活動状況は、父親が昭和48年(1973)年より始めたMOA自然農法水田を引き継ぎ、平成13年(2001)年にJAS有機農産物生産圃場の認定を取得して、面積を拡大しているそうです。平成21年(2009)年現在、JAS有機認定水田463a、その他の水田は全て農林水産省新ガイドによる、特別栽培米を生産しているとの事でした。水稻で収穫される米は、有機JAS米が、きらら397、ななつぼし、ゆきひかり、早期湛水有機JAS栽培米は、ななつぼし、MOA自然農法では、ななつぼしが主に収穫されるそうです。

平成14年(2002)年からは、水田除草機「ティラガモ」を導入する事により、除草剤不使用の水田を拡大しました。

平成16年(2004)年からは、農業体験受け入れ組織「元気村夢の農村塾」に加入し、中学生、高校生の農業体験の受け入れを始めました。その後平成17年には、北海道地区MOA自然農法文化事業団の指導の下、畝立て耕起法による、農薬不使用・肥料不使用栽培試験を始めました。黄倉さんによると、収穫後の整地の作業は通常の農業とあまり変わらず、水に関しては、用水と排水とを区別して使っているため、水汚染の心配は無いとの事でした。また、収穫量は、肥料を使用した通常の水田で収穫される米の量を8俵とすると、肥料・農薬不使用の水田で収穫される米の量

は6俵の収穫量があるそうです。



チェーン式除草器

今後、日本が直面する農業の問題は山積していますが、肥料の安定的な確保が重要な課題になると言われています。発展途上国などでの農業の拡大による肥料需要の増加やリン鉱石の枯渇によって、肥料の需給がかなり逼迫する恐れがあります。自然農法は収量に関して慣行栽培と比較して減りますが、肥料や農薬を使用しなくても収穫が出来る水田農業を見直すことが出来ました。

3. 中野ファーム見学

「ナチュラルファーム黄倉」で黄倉さんに教えて頂いた、「農薬不使用・肥料不使用」で作物が生育するという事実に感銘を受け、「環境に優しい農業は発展しつつある」という思いを胸に、我々は車に乗り、最後の見学地である中野ファームに向かいました。

中野ファームに到着すると、健康的に日焼けした中野さんに出迎えて頂き、とても饒舌にお話を頂きました。

「中野ファーム」は、中野さんが2代目で、主な作物は米、麦、ナタネです。

中野ファームでナタネの作付を開始したのは20年ほど前になりますが、加工・販売を始めたのは2004年のことだそうです。補助金制度がなくなるのに対応したもので、「育てて搾った中野の気持ち」という名前をつけ、300gで840円という価格で販売しました。当初は年に300本も売れば良いかな、という見通しでしたが、現在は2000本を販売しているそうです。



搾油所兼ゲストハウス

また、中野さんは休耕期にはスキーのインストラクターをしており、生徒たちに自分の仕事のことを話すことも多いそうです。それがきっかけで農業に興味を持ち、実際に中野さんを訪ねてくる生徒もいるそうです。こうした農業とは関係のない仕事から、農業に興味を持たせる様な話をする事により、就農者が増えるのでは？という思いを強く持ちました。

4. 懇親会

中野ファームをあとにした我々は、宿泊施設兼懇親会会場でもある歌志内市の「カモイ岳ビレッジ」へと向かいました。到着すると、

休む間もなく木炭に火が付けられ、ロッジに隣接する広場で懇親会が始まりました。懇親会には中野さんも参加してくださり、皆で焼き肉を食べながら、合鴨農法を行う意義や北海道における有機農業の意義等について語り合いました。夜が更けると場所を屋外からロッジに移し、宴は日付が変わるころまで続きました。

おわりに

今回初めて合鴨水稻会の圃場見学会に参加させて頂き、強く感じた事は、会員の皆さんは、非常に環境保全と農業の一体化という目標に向かい、真摯かつ懸命に努力をされているという事です。それに加えて、会員の皆さんが非常に優れた起業家であり、合鴨農法・有機農法といった難しい領域に果敢に挑戦され、成果を挙げているという点に、深く感銘を受けました。

最後にはなりますが、見学を快く引き受けていただきました川本さん、黄倉さん、中野さん、そして道央ブロック世話人の方々には厚くお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。



名寄徒然草 (6)

食用油と肥料の自給率向上を目指すひまわりプロジェクトの取組

三島 徳三 (名寄市立大学)

名寄市立大学に道北地域研究所という施設があり、昨年4月から私が所長を務めている。研究所といっても道庁から出向している特任研究員と嘱託事務員がいるだけで、研究スタッフすべて名寄大学教員の兼務だ。ここで昨年、研究所のプロジェクトとしてひまわりの栽培と搾油の試験を行っている。

ひまわりは名寄のシンボル・フラワーだ。市内の幹線道路のあちこちに大きなひまわりの看板がある。しかし、ひまわり畑が大面積で見られるのは智恵文地区の一部で、その畑も、観光客によるシスト線虫の持ち込みを恐れる周辺農家のクレームによって2年前から作付中止になっている。その代わりとなっているのが、市内日進地区にある道立サンピラー公園だ。ここではラベンダーやコスモスとともにひまわりを景観作物として植栽し、観光客呼び込みの手段としている。そのサンピラー公園の管理者の協力を得て、昨年、研究所管理のひまわりを10a植えさせてもらった。

種子は油糧用で、ホクレンから分けてもらった。現在、道内で栽培されているひまわりは、そのほとんどが緑肥用で結実する前に畑にすき込まれる。これに対し、われわれが手に入れた油糧用種子はオーストラリアからの輸入品で、健康に良いとされるオレイン酸組成が高い。だが、長茎・大輪で倒れやすく、栽培管理が難しい。

しかし何とか収穫まで漕ぎつけ、搾油用として約80kgの種子を確保した。収穫も脱粒も手作業で、調整は唐箕で行った。

搾油は中型の電動搾油機を40万円ほどで調達し、大学内で行った。ろ過にけっこう時間がとられたが、約22kgの油を搾ることに成功した。搾油率は27%である。これを270gずつビン詰めし、モニターに配布した。研究所は製造免許を持っていないので、販売はできない。

名寄では智恵文地区を中心に10年くらい前まで、旭川市の油糧会社との契約でひまわり栽培を行っていたが、同社の閉鎖でその後途

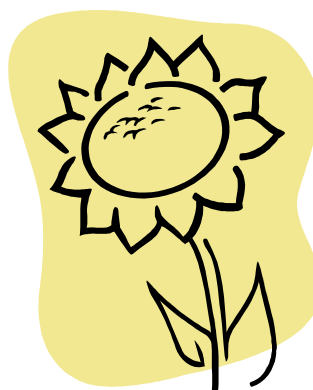
絶えていた。量は少ないが、われわれによる油糧用ひまわりの栽培と搾油はそれ以来である。一時脚光を浴びた北竜のひまわり油も2003年に製造が中止されている。国内でも兵庫県の旧南光町ほか何カ所しかひまわり油の製造を行っていない。

食用油全体でみると、わが国のその自給率はたった4%である。国内で流通している食用油の大部分は輸入した菜種や大豆を原料とした「国内産」である。食事の洋風化によって食用油の需要は今後とも減ることがない。ひまわりは菜種とともに国内で振興可能な油糧作物であり、もっと関心が払われてもよいのではないかと思う。

また、ひまわりの根には、VA菌根菌が共生しているが、この菌は土壤中に残留し固形化したリンを、可溶性に変える機能がある。ひまわりの後作に小麦、大豆、とうもろこし等を植えると収量が上がるといわれているが、それには以上のVA菌根菌の働きがある。いわば土壤中のリン酸を再利用するわけで、結果的にリン酸肥料の投入を減らすことができる。

世界的にみるとリン酸肥料の原料であるリン鉱石も枯渇しつつある。肥料の自給率を高めるためにも、ひまわり栽培の意義は大きい。

ひまわりプロジェクトは、今年、名寄農業高校との間の高大連携事業としても進めつつある。



事務局からのお知らせ

●次回の全国フォーラムについて

次回の全国フォーラムは2009年12月5日(土)・6日(日)の2日間、山陰島根県は吉賀町柿木村で行われます。柿木村(かきのきむら)は日本の棚田百選に選ばれた「大井谷の棚田」で有名なところ。隣の六日市町(むいかいちちょう)と合併し吉賀町(よしかちょう)となりました。

今回は20回目の節目となるフォーラムでもあり、合鴨水稲会の今後の活動方針や合鴨水稲同時作の技術に関する総括を大会の中で行う予定です(全国合鴨水稲会「合鴨通信」より)。

詳しくは事務局までお問い合わせください。

●年会費の早期納入にご協力ください

本会は会員の皆様からの会費によって運営されています。円滑な運営のために、早期の納入をお願いしております。年会費は3,000円です。

納入先：北海道合鴨水稲会

郵便口座番号 02700-3-38241

編集後記

この夏は不順な天候が目立ち、水稲の生育にもやや遅れが出ているようです。会員みなさまの地域ではいかがでしょうか。▼さて、開催から2カ月ほどたってしまいましたが、圃場見学会の報告をお届けいたします。2件目に訪れた見学先の黄倉さんは、北大農学部ご出身とのこと。しかも、農業経済学講座の三島ゼミの卒業生だそうで、思わぬところで先輩にお会いしてびっくりしました。(庄子)

北海道合鴨水稲会 水かき通信 第29号
2009年9月7日 発行

(連絡先) 北海道合鴨水稲会 事務局
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院農学院
共生農業資源経済学講座 食料農業市場学分野内

庄子太郎・村田均・佐々木稔基・小板橋正裕

TEL : 011-706-3858

FAX : 011-706-2470

e-mail : shoji-t@agecon.agr.hokudai.ac.jp

HP : <http://hokkaidoriceduckfarming.web.fc2.com/>